Osaka Shoin Women's University Repository

資料紹介

大西家蔵番外謡本（三）

西畑　実

石神

次第〳〵願ひをみつる神社、〳〵、和く光仰かん　ワキ詞「抑是ハ当今に仕へ奉る臣下也、扨も我君石神へ御宿願の由諸有により唯今参籠仕候　道行〳〵春霞立帰るへき空そなき、〳〵、花の匂ひに倡（イザナ）れ、心も空に楢柴のなれもて行ハ面白ヤ、谷の小川もとけ初て、四方も長閑き春の比、宮居く着（ニ早）けり　〳〵　ワキ詞「急候程に、是ハはや当社の御手洗に着て候、暫く爰に休らひ心の濁りを清めハやと思ひ候　シテ一セイ上〳〵鏡にも、影御手洗の水の面に、移る計の、心とをしれ　ワキ詞「ふしきやな今迄ハ、人気（ケ）もあらぬ神前に其様けしたる老翁出て、かく心有和哥を列（ツラ）ね給ふ、扨〻おことハいか成人そ　シテ詞「是は此明神に年久しく仕へ申、真砂地（マサゴ）を清め申者にて候、扨唯今の御参詣ハ、何の為にて御座候そ　ワキ「是ハ当帝の臣下なるか、初て此所に来りて候、当社の御謂委く語給へ　シテ「さん候我等賤き者にて候へハ委事ハいさ白波の、よるへなき身にて候去なから、有増承及たる通り申上うするにて候、抑当社明神と申ハ、威徳を普天にあまねく、済度国土にミちたる中に、第一乳味（ニウミ）を与（アタ）へ給（イク）ふ、殊に此御神ハ、子孫繁昌を守り給ふ御事なれハ、孫子養育にハ乳汁（ニウジウ）なくてハ叶ひ難し、されハ左京大夫藤原の清輔（スケ）が一首の哥に、下〳〵石神を頼む甲斐にハ世間に、詞「かしらかたくて過しつるかなと、か様に読て神慮に睦（ムツ）ひ給ひし由承て候　ワキカ、ル〳〵扨〻か様に語り給ふ、今こそ不審春の日の　シテ〳〵遅〻たる雲も暮方に　ワキ〳〵野寺の鐘も音絶て　シテ〳〵日も入相と　〳〵夕ま暮　上哥同〳〵今宵ハ爰に通夜をして、〳〵、神の誓ひを待給へと、夕闇の夜に立まぎれて社檀に入せ給ひけり　〳〵　ワキ上哥〳〵御殿頻りに鳴動し、〳〵、妙なる御声音楽の、聞て異香薫すなる、実あらたなる、奇特哉　〳〵

Osaka Shoin Women's University Repository

後シテ〳〵千早振、神独貴からす、人の敬ひによる、丸ハ是本ハ東方浄瑠璃世界の主、医王如来の変身として、名を仏経に顕ハし、今ハ叡哲聖主の周衛として他を神州にかうむらしむ、緋の玉垣物旧て、千木もまがらす正直方便の白をしめし、老樹老杉葉をたるゝ、下化衆生の相を見するなり　地〳〵やつかれかけまくも忝し、天照大神、一切のうなひ子を、寿命長穏に鎮護すへしとの詔を請て、此芦原の、中津国に天降り　〳〵宮柱下津岩根に太木立、同〳〵子孫擁護を専とするに、乳味をぼろけにてハ、争か襁褓を立はなれんと、此誓約をなし給ふ　〳〵呉竹のよよの末葉に至る迄、嬰児を、さかゆきしむるなり、然れハ古冷泉院の御宇かとよ、永承のころほひ社を建立し給ひ、翌年の冬の比、従三位を叙せられ、世にその隠れなかりけり、本地の悲願、垂跡の化導、今以て猶多し　上〳〵夫乳汁を与ふ事、同〳〵童男童女を撫育するに人と成までの数量を、釈尊考へ見給ふに、八斛四斗と恩重経に説給ふ、羊ハ母の乳をのまん時ハ、踞ひて乳房を礼す、況ヤ人倫においてをや、乳哺の恩徳甚しと申なり　シテ下〳〵去程に時移り、〳〵、きねか皷も声〻に、稀人をなくさめんと、明神も袖を返し拍子を揃へて舞給ふ　シテ下〳〵かくて夜もはや明方の、同〳〵かくて夜もはや明方になれハ、勅使ハ御暇申させ給へハぜんざい〳〵と感し給ひ、乳水不足の輩は、我に祈りをみしめ縄、かけてひとへに頼ミなは、願望たちまち成就して、空しき事ハよもあらしと、雲の上人に告知せ、雲の上人に告しらせて、神はあからせたまひけり

誕生寺

次第〳〵濁りにしまぬ蓮葉の、〳〵、花の台に至らん　ワキ詞「是ハ都東山黒谷の辺に居住の僧にて候、我若年の昔より、元祖上人の流れを汲といへ共、未美作国誕生寺に参らす候程に、此度思ひ立誕生寺へと志候　道行〳〵思ひ立紫雲の山を跡に見て、〳〵、西に向ふの神社、手向のぬさを須磨明石美作山の春霞、立や宇那提の森を過、久米の更山余所に見て誕生寺にも着にけり　〳〵　詞「急候程に、是ハはや誕生寺に着て候、暫人を相待、委く案内をも尋申さうするにて候　次第女〳〵高根の花ハ匂へ共、〳〵、麓の人やしらさらん　サシ〳〵是は此あたりにすむ女にて候、我等賤敷身なれ共、他生の縁もや積りけん、歩ミをはこふ御値遇、頼む仏の御手の糸、導き給へ、法の声　下哥〳〵美作や久米の更山さら〳〵に、我名ハたてし万代も　上哥〳〵様〻に教の道の甲斐あれと、〳〵、わきて超世の誓ひの海、水底清き流れかや、是そ誠に吉水の大慈大悲の力也、〳〵　ワキ詞「いかに是成女性に尋申へき事の候　シテ女「此方の事にて候か何事にて候そ　ワキ「是ハ都方の者にて候か、未誕生寺を拝ず候程に、此度思ひ立遙〻参詣申て候、委く教へて給り候へ　シテ「それこそ安き御事にて候、殊に〻つから参詣の者にて御座候程に、御道しるへ申候へし此方へ御入候へ　ワキ「荒嬉しやさらハ御供申候へし　シテ「是こそ誕生寺御影堂にて御座候へ。能〻御拝ミ候へ　ワキ上カ、ル〳〵有難や、積善仏種の縁起り、今目前に尊影を、拝し申そ忝き、下〳〵誠に宿習開発ぞや、詞「扨此御影ハ何の比より、当寺へ

Osaka Shoin Women's University Repository

安置しましますそ、上〳〵委く語り給ふへし　シテ詞「さん候人王八十代、高倉院承安五年、元を改て安元と号す、其春の比都より此寺へ遷移おはします、則上人四十三の御年、手つから つくらせ給ふなる、世にたくひなき御影ぞかし　ワキ「仰のことくたくひ稀成尊影かな、扨又あれに見えたる大木の、枝葉さかへて立たるハ、如何様聞及し誕生椋にて候やらん　シテ「実能御覧じとがめたり、抑上人誕生の御時、此木に紫雲たなびき音楽聞え、幡二流天下り、七日か間留りて、花ふり異香薫すなり、されハ其移り香今に残りて候、其後彼木を伐て珠数となし、皆人是を成仏の、位階を昇る所作と名付、六字の御名をとなへつゝ、上品の菩提の種の植木也、なんほう有難き御事にて候　ワキ「実有難き名木なれ、然れハ先珠数となりしに、今の木立は如何成ぞ　シテ「されハ社幾度も施す間には若立の、本のごとくに栄へぬる　ワキカ、ル〳〵尋常ならぬ法の木の、匂ひ妙成花さきて、すゑの世迄もつきすまし　シテ「其外品〻瑞相あり、孔雀鳳凰舞さかり、五葉の松に宿りしハ、彼国常有の鳥とかや、又白鳩番飛来り、栗の木に宿りしハ、九品を顕す鳥ならん、ワキカ、ル〳〵扨西の木ハ極楽の、宝樹の枝に准ずべし　シテ詞「中にも不思儀妙成ハ、沢にもあらぬ芝原に、蓮色能生せしハ、是こそ上品蓮台の奇瑞霊験あらたなれハ　ワキカ、ル〳〵仏とも菩薩とも　シテ〳〵この上人を　ワキ〳〵拝むへし　上同〳〵実や貴き上人の、済度の衆生幾ばくぞ、事も愚やかゝる世に、生るゝ衆生数〻に、よむともよもつきじ、末の世迄も摂取不捨、平等利益有かたや　上ロンギ地〳〵不思儀や女人かく計、法の理り聞からに、只人ならぬ有様の其名いか成人やらん　シテ「我名を何と夕月の、影くらからぬ上人を、養育し参らせし乳母の老女来りたり、地〳〵扨ハ疑ひあら磯の、波のよる昼立そひて　そだてし公ハ勢至丸　地〳〵悪を報して　シテ〳〵南無阿弥陀　下同〳〵阿弥陀仏南無あミた、扨こそ我等も今ハ早、還到本国して、光明遍照曇なし、有し昔のミづからが名をはし漏し給ふなと、云かとミれハかけろふの跡はかもなく、失にけり　〳〵　ワキ上哥〳〵終夜鐘打ならし声立て、〳〵、摂取の光も明らかに、月澄渡る明がたの、遠寺の鐘も響くなり　〳〵　後シテ上〳〵有難や彼上人の教へのことく、智者の振舞をせすして、只一向に念仏申しくどくにより、疑ひもなく決定して、かぶの菩薩と成たる也、荒有難の御事やな　ワキカ、ル〳〵実有難き御事かな、猶上人の教への御法、委く語り給へとよ　シテクリ〳〵夫往生といつは、決定と思へハ決定、同〳〵不定と思へハ不定也　シテ〳〵聞其名号信心歓喜　同〳〵及至一念願生彼国、即得往生一向専念、無量寿仏の、宝座に座せるとかや　サシ〳〵実や十劫正覚の、月の光も有明の、同〳〵本願成就の如来ハ、西方浄土の能化にて、衆生の為の父なれハ、あをぐにたらぬ、孝ぞかし　クセ〳〵抑あだし野の、夕の露もすミやかに、枯草に置し朝霜と、消ぬときなき世中を、夢と思ハぬはかなさよ、去にても皆人の、罪障の山高く、生死の海のふかふして、有時ハ色に染貪執の心やミがたく、又折ふしハ声を聞愛着の思ひ浅からす、心に思ひ口に云ふ、身三口四意三の十の罪多かりき　上〳〵頼母しや誓の舟のミなれ棹、同〳〵千引の石もうかふてふさしても岸ハ近き江の、爰を去事遠からす、しん力といひ仏力ハ、皆是弥陀尊の諸仏も護念有難き　シテ下

Osaka Shoin Women's University Repository

〳〵すハや菩薩の舞歌の曲　上地〳〵不思儀や異香薫しつゝ、歌舞の菩薩の舞の袖　マイ　上同〳〵声を合せて舞遊へハ、〳〵、まことに殊勝の道場やな　シテ上〳〵扨こそ今ハ、己心の浄土　同〳〵唯心の弥陀の、利剣ハ愚癡のたち大悲の弓に、智恵の矢をはげ、いるとも立ともふだんの念仏、一心不乱、即得不退の素懐を遂よ、是迄なりや、吾ハ又、成道の春に、帰るぞとて、夕の空に、紫雲たなびき花ふりて、〳〵、西のそらにそ入にける

二　本　杉　ミサホトモ

次第〳〵行衛定すゆく旅の、〳〵、泊りハ何く成らん　ワキ詞「是ハ参河の中村より出たる僧にて候、我此度都に上らハやと思ひ立て候道行〳〵住わひし国の中村立出て、〳〵、行ハ程なくミこし野やすのまたあじかおよびの橋、陸の渡りやミえし野の、赤坂垂井早過てあふはかの宿に着にけり　〳〵　詞「急候程に、美濃の国あふはかの宿に着て候、漸日も暮かゝり候程に、此所に泊らハやと存候　シテ女次第〳〵入日にみがく玉衣の、〳〵、風にさらせる夕べかな　サシ〳〵是ハあふはかに住女にて候、実や何事も皆夢の世とうち覚て、昔を何と忍ふ草、はかなき今の思ひかな　下哥〳〵枯たる木にもまさしく是そふしきの青緑　上哥〳〵夏草のことしけく共玉ほこの、〳〵、道の道たる時なれや、山風も治りて梢ゆるかぬ深みとり、松もしけミの枝そへて、御代も常盤の、気色哉　〳〵　ワキ詞「不思儀やな是成女性の、早暮方に只ひとり、是成杉の木の本に、廻向の気色見え給ふハ、いか成人にてましますそ　シテ詞「是は此あふはかに住女成か、爰に歩ミをはこぶ事、是こそ大師の二本の杉、則是こそ大師なれ、拝ミ給へや御僧よ　ワキ上カゝル〳〵ふしきの事を聞物かな、かゝる野中の杉の本を、大師と云ハいか成事そ　女上〳〵実〻是ハ理り也、遠国迄はかゝるふしきを、聞も及ハせ給ハぬよなふ　ワキ詞「中〻の事何とてか、謂を知へき様もなし、上〳〵委く語り給ふへし　女上「扨も此二本の杉と申ハ、弘法大師帰朝の後、谷ぐミの観音へ参籠ましましける下向道に、此所を御通り有しに、つかれにや及ハせ給ひけん、此処に暫く休ませ給ひけれとも、何にても参らする人もなかりけるに、爰にあふはかの長の内に、ミさほといへる女の有しか、御姿を見るよりも、唯人ならす見参らせ、かゆのあつ物を参らせ、御つかれをはらさせ給へと申しかハ、大師其志しの真成を感じ思召、扨も汝か志し、いつの世にかハ忘るへき、此所仏法繁昌の地となすへし、然らハ、此杉二度青葉を栄へ出すへしと、御箸を此地にさし給へハ、かく迄成長いたす事、上カゝル〳〵誠に仏の御方便　上同〳〵有難し〳〵、誠ミちある其ためし、草木国土皆成仏の縁そ有難き　上ロンギ地〳〵実〻聞ハ有難や、か程妙成名木の、塵にましハる神こゝろ末世の為か頼もしや　シテ上〳〵今も誠を先として、歩をはこふともからハ、二世安楽の台に、むかへ給ふそ有難き　上同〳〵かくて此日も入相の、鐘も早声〻に、いざゝせ給へ御僧、我も昔の物語、夜すから語り申へしミさほの山のむかひ成杉たてる門をしるべぞと云捨て見えす成にけり　〳〵　ワキ詞「ふしきや今の女性、唯人ならす見る所に、みさほの山のむかひ成、杉立る一村と云捨失て候、余りにふしき成事にて候程に、終夜経念仏し吊らハは

Osaka Shoin Women's University Repository

やと思ひ候　上同〳〵名に高き戸さゝの森を立出て、〳〵、行ハ程なく二本の杉立る門をしるへにて、さほの山風声そへて、此御経を、読誦する　〳〵、若我成仏十方世界、念仏衆生摂取不捨、南無阿弥陀仏　後シテ上〳〵荒有難の御法やな、本より罪障深き女人なれ共、変成男子の御願にて、即得成仏疑なき、御法の花の台に座せん、荒有難や候　ワキ上カ、ル〳〵ふしきやな見れハ女性の姿成か、さもいさきよきゆふたすき、懸て見ゆるハいか成事そ　シテ詞「中ゝの事我ハ是、ミさほと云れし女成か、大師のつかれを休め参らせし、其心実成し故、末世に残る杉箸の、二本の杉と青葉をさかへ残し給へハ大師の森共、戸さゝの森共申也　ワキ上〳〵荒有難や扨ハかく、神道仏道曇りなき、位に至り給ふかや　シテ〳〵あか棚に残る一ッ枝をもワキ〳〵神の榊葉　シテ〳〵仏の手向　上同〳〵隔ハあらし有難や、水波の御をしへ、衆生の機にや応ずらん、迷ふも悟るも心そや、されハ心の師とハなり、心を師とせされと古き詞にしられたり　クリ上地〳〵夫草木心なしとハ申せ共、時をたがへぬ青葉の気色、弘仁七年孟夏の比より、今に絶せす　サシ〳〵然るに此二本の杉ハ、いつも常盤の色をなし、同〳〵絶ぬ詠めの若緑、花よりも猶珍らしき四方にさかふる枝ゝハ　シテ下〳〵誠妙成大師の奇瑞、同〳〵申も中ゝ、おろか也　クセ〳〵春の風空に吹らん庭前の、詠めもあかぬ夜の雨石上の苔や茂るらん、陽春の時来りて、ミとりの空も長閑に、めくゝを得たる草木も色めく四方の春の山、世にふる三輪の杉本や、大和路の神垣是も所の名によれり　上〳〵其外杉立る名所の、同〳〵数ハいかてか白雲の、あふ坂の関の杉村ハ大内に見ゆる望月の、出るそなたや東路の、箱根の山の名にきく、矢立の杉ハ今迄も、栄へ久しき御代の茂りやまさるらん　下地〳〵をちこちの　シテ上ワカ〳〵遠近の、たつきもしらぬ、ミさほ山　下地〳〵杉の下枝に、帰るらん　シテ下〳〵杉の下枝ハ幾年か、下同〳〵〳〵、墨の衣の身と成て、思へハ昔のさほなぐるまの廻りくる、輪廻にひかれて又もや昔のみさほか姿、恥かしや〳〵かり成宿に、心とむるゆへ暇申てさらハとて、立くる白雲に打乗て、西の空へそ、入にける

豊原寺

次第〳〵賢き君の御代そとて、〳〵、国ゝ直成覧　ワキ詞「抑是ハ利仁将軍とハ我事也、扨も我越州豊原寺へ宿願の子細候処に、則成就し、唯今参詣の為、北陸道へと志し候　道行〳〵遙ゝと雲井の都立出て、〳〵、けふ近江路に打向ふ、鏡山をハ余所に見て、風もあらちの秋の空、あさち色つく矢田の野や、いつはた坂をきのめちの、さかしき岩ね踏分て、明し暮せハ程もなく、豊原寺にも着けり〳〵　詞「急候程に、豊原寺に着て候、先山上申さうするにて候一セイ二人〳〵万代を、松の千年の色そへて、君を守の、神慮　ツレ女〳〵ゑならぬ山のとこしへに、二人〳〵深き宮居の、気色かな　サシ〳〵三秋の巌雪花初て白し、一夜の林霜葉悉紅なり、二人〳〵猶照せ世ゝに替らぬ我山ハ、仰く岑より出る月影と、いつとても住あかさりし此寺の　上哥〳〵日ゝ夜ゝの鐘の声、〳〵、有難やおのつから何か御法の外ならん、松の嵐も実相の唱に洩る、事そなき　〳〵　ワキ詞「是へ来り候は如何成者にて候そ、寺門の来暦懇に語り候へ　シテ

Osaka Shoin Women's University Repository

「何国より御参り候へハ、寺の来暦を御たつね候そ　ワキ「我ハ利仁将軍なり、爰に下野国かうざの岩屋に、さうふざうあんとて、世上に隠れなき悪逆の党類立籠り、寛平五年より延喜八年に至迄、十六年の春ン秋ゥを送る、都鄙の歎き斜ならさるにより、急退治仕れとの倫言給つて、関東に下向し、彼悪党を平げし所に、則天下静謐し、宝祚延長の眉を開き座ます事、偏に当寺の霊験なれハ、心中報謝の為唯今参詣申て候　シテ「荒目出度や候、此方へ御参り候へ、当寺ハ文武天皇の勅願、大宝二年に泰澄大師の御草創勅使ハ大伴の安麿にて候　ワキ「あれに霊水漲り落ち井垣の中に大石を浸し置候ハ、如何成由諸候やらん、シテ「さん候あれこそ当山の閼伽井にて候へ、又井垣の内の石ハ、紫雲ン石キとて故有石にて候　ツレ女「されハ泰澄大師、始て越智の岑より遙に此山を見渡し給ふに、紫雲ン一村あの石より棚引けり　シテ詞「夫を知べに分入て、先寒泉を得給ふに、あたか八功徳地の甘味のことし　ツレ女上「水の流万事の形を顕す　シテ「機感本有の仏像なれハ、嶺嵐渓声おのつから、皆法身の妙文を誦す　ツレ女上「其時権現九頭の龍王と現して此池に浮ひ給へり　シテ「然共大師少シも驚き給ハす、是ハ護法所感なり、願くハ微妙の尊体を拝し奉寛と、至心ン心ン行し給へハ　下同「悪龍忽に、十一面観音と顕れ、三十三身の月の陰、山谷草木皆金色に映徹す、元来大慈大悲の、善巧方便の余りにや、受苦の衆生に替りつつ、奈落の炎底に遊ふ事も、只是此神の御誓成そ有難き　ワキ詞「扨真蛇王の御事承度候　シテ「あふ此由来を承候に、本地ハ妙覚無上の如来須弥の半腹に居してハ廿八の上衆、又帝釈の武将たり、爰に淳和天皇の聖代に、当寺再興せうもう和尚出世の砌、此山ン頭に化生し給ふにより、あの山を化生の嵩と申伝へ候　ワキ上「扨其比は　二人「天長年中　ワキ「世ハ澆季に　シテ「及ふといへ共　ワキ「天長く　シテ「地久しく　上同「国土安全民栄へ、〳〵、応神一致の政、怠らさりし宮寺の法の燈明らかに心を澄す、夕へ哉〳〵　ワキ詞「近比殊勝に候、猶ゝ御物語候へ　クリ上地「夫伽藍と申ハ、劫名を諍てひたすらかならす、妙理権現の社壇ハ、法性かく山に、そハたつ　サシ「和光同塵の花の色ハ、一天に芳敷、同「医王善逝の本覚ハ、真如のゆうけいにおろそかなり、三しきかんの月の陰ハ、四忍いの波に浮ふ、上求菩提の粧ひ、下化迷闇の理りなり　クセ「倩開基の、心ン立を尋れハ、都卒の内院を表し、三宝の寿福をたもち、五十六億、七千万歳の箇算を期すとかや、しかくの因縁を伺へハ、日域の惣名、豊蘆原を司とる、またふまんけんつう、しんじやりうせんの法なれハ、豊原寺とハ名付たり、三所の玉殿を開き、白山と号すも、しんつうゆうしよ、仏法流布のせうかつ、一山の七院ハ、七重結界、天の七星の、降照の地なれハ、七社の神祇を安置す、南北の両殿ハ、胎金両部、本寂の二文、九識法性の床の上にハ、真如平等の月澄り、けんしよさんぎやうの、窓の前にハ七仏乗の花薫す　上「然に本尊薬師は、さうぼうてんしの化道を垂て、色香味の良薬を、衆生にあたへ三毒、めいたうの、病原を治すとかや、十二神将ハ方ミに立て相応の、妖気を払へり、誠に四神相応の霊場と申伝たり　上ロンギ地「扨も委き物語、聞に付ても霊窟を拝む心そ有難き　シテ上「実今迚も神の代の、誓ハ尽ぬ法

Osaka Shoin Women's University Repository

の門貴賤の道も普しや　上同〳〵殊に妙成雲のいる、雪の白山おひにけり　シテ〳〵多くの年の　同〳〵数積りたる此尉か、守護し給へるぶけいぞと名乗もあへす、失にけり　〳〵　ワキ上哥〳〵嬉しき哉やいさ更ハ、〳〵、今宵ハ爰に通夜をして、神の告をも待てミん　〳〵

天女上〳〵我昔本覚不愛の都に有て、法身無作の月を澄し　同〳〵今ハ三土随縁の塵に交り　天女〳〵利生方便の誓を顕ハす　上同〳〵有難の影向や、〳〵、花降異香薫しつゝ、紫雲太虚に満ゝて、爰そ則補陀楽世界の、色〻の荘厳、実目の前に面白や　上同〳〵不思儀や俄に黒雲おこり、〳〵、白雲ン頻りに降来り真蛇流せんの洞、震動せり

後シテ上〳〵是ハ流沙蒼嶺の巷にすんて、なんぶせうりやうの司を得たる、真蛇大王なり　上同〳〵恒沙の眷属諸共に、〳〵、顕れ出たる姿を見れハ、悪眼忿怒の羅刹の像も、恐しや　シテ上〳〵我善悪両こうの守護神と成ッて、同〳〵朝にハ三使を遣し　シテ〳〵信心の門にハ三笑を払ひ　同〳〵夕へにハ七鬼を下し　シテ〳〵渇仰の所に、七福を譲る　上同〳〵願を祈れハ諸願を成就し歩を運へハ、歓喜微笑の神慮を冷しむ有難や　シテ下〳〵妙理権現ハ冠を傾け　同〳〵忍辱の衣の袖を翻し、挙足下足の拍子を揃、舞遊ひ給ふ、真蛇大王諸共に、によやうすいきやうの、あひれむをくハへ、又立帰り、御身を守らんと云声計、虚空にひゞき、いふこゑはかり虚空におとろきて、すかたは雲路に、入にけり